

---

# 俺達の青春部。

中里肴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺達の青春部。

### 【Nコード】

N8017Z

### 【作者名】

中里肴

### 【あらすじ】

“ 日本文化研究サークル ” またの名を “ 青春部 ”   それが俺の所属するサークルである。       これは “ 青春とは何か ” を模索しながら今日も雑用に励む青年の物語である。

## 入部。

“青春”

この二文字を聞いて皆さんは何を思い浮かべただろうか。スポーツ、勉強、恋愛、その他etc…。色々あると思う。

それではもう一つ。あなたにとっての青春時代とはいったいだろうか？ 俺にとっての青春時代、それは高校の三年間、つまり今のはずなのだが

「高澤さん、あの、」

「　　なにか」

「そろそろ下校時間なんすけど」

「そうね。それで？」

「いやいや、だからねっ、」

説得を始めて十五分。生返事を続けてきた彼女も遂に観念したのか辞典ぐらい厚さのある本をわざとらしく音をたてて閉じた。

「　　チッ」

（クッ、舌打ちだ！？　この女…ッ！！）

「仕方無いわ、帰ってあげる。その代わり戸締まりはしておいて。それじゃあ、」

「ちよっ、飯にも部長で　　」

彼女の細い指先が俺の唇を塞ぐ。

戸惑う俺に、片目を閉じてトドメの一言。

「よろしく、ね？」

『スカートの下に尻尾でも生えてるのでは？』と思わせるほどの小悪魔ぶりを発揮して、部室を後にする彼女を見送ると深い溜め息と共に点検を始めたのだった。

“青春部”

それが俺の所属する部活動いや、サークルの“裏”の名だ。

『素晴らしき日本文化を学ぶ』という怪しさ抜群のサークルとして、現副部長が知略の限りを尽くして承認させたのだとか。（一体何をしたのか考えるだけでも恐ろしいので触れないでおく。）  
それでは何故このような如何わしいサークルに俺が所属しているのか。

それは、今から一月ほど前に遡る。

~~~~~

小中高一貫のミッション系の私立学校に、高校からの編入組として入学した俺は青春を謳歌すべく意気揚々と乗り込んだわけだが

何をすれば、青春なのだろうか？

その素朴で難解な疑問に答えを出せぬまま一ヶ月が過ぎようとしていた頃だった。殆ど会話を交わした事が無い担任から呼び出された俺は、こう告げられた。

「入部届けの提出は今週中までだから」

「入部…届け？」

馬鹿みたいにオウム返しした俺に半ば呆れつつ説明してくれた。

「『一年の間は何処かの部活動かサークルに所属しないとならない』と二週間前に説明したはずだけど？」

白髪頭を掻くと机の上の採点済みの小テストの束を押し付けて俺を追い出した。

（今週中って今日までじゃねえか…。）

部活選びは学校生活において重要なポイントの1つだ。友人関係に強い影響を及ぼす事は間違い無いだろう。

頭を抱えなくなるが、今は悔やんでいる場合じゃない、入部先を決めなければ。

元帰宅部の身としては運動部は遠慮したいところだ。

（そっいえば文化系の部活って何があったかな？）

ろくに調べもしていない事に気付き、慌てて部活動紹介の紙これも先日渡されていたらしい　を貰うと、授業もそっこのけで部活選びを始めた。

「で、決まったかい？ 部活」

「決められませんでした…。」

「そうそう、言い忘れてたけど、」

「？」

「今日中に決められなかった場合、こちらの独断と偏見で決める事になるから」

「え」

「遠藤ならそうだなあ…うん、オカルト実験サークルか競歩部だな」  
「いや、ただだけコアなチョイスですか！？ それにオカルト実験  
つて、研究じゃなくて！？」

「君は実験体としての入部だから」

「却下！！」

「あとは、けいおん部とか」

「平仮名表記に別口の意図が見え隠れしてますよ」

「S S団とか、入部条件満たしてるしどうだ？」

「伏せ字の意味を為していませんが！？ そもそもあんのS S団  
！？」

「他に残ってる文化系ってあったかなあ？」

「競歩部も文化系扱い！？」

「ああ、あったあった。これ、日本文化研究サークル」

「やや突っ込みづらいモノ出さないでください。困ります」

「僕も君が部活決めてくれないと困るんだけどね」

「ぐぬぬ」

「初めて見たよ、『ぐぬぬ』って言う子」

「分かりましたよ、それじゃあ決めてやりますよその中からッ！！  
さあ阿弥陀くじでもなんでもきやがれ！！」

オカルト実験部以外なら何処へなりとも入部してやる！！

「それじゃあ少し待ってて。すぐに戻るから」

「はいお待たせ」

「これはまた立派なルーレットですね…」

「部活動も自分で決められないほど優柔不断な上、同じ部活に誘ってくれる友達すらない可哀そ　哀れな生徒の為に用意されたモノだからね」

「むしろ可哀想と言ってくれた方がダメージ少なかったんですけどね！？　とりあえずお借りします！！」

「ちなみに君の意見を汲み取って半分がオカルト実験部で埋められている」

「イヤアアアア！！」

「それじゃあスタート　あ、十秒以内によろしく、電気代かかるから。10、9、8、7、6」

「ストップストップ！！」

「お、これは」

『日本文化研究サークル』

「オカルト実験部以外なら良いんだよね？　それじゃ決定」

「こんな決め方…」

やはり何か納得出来ないでいる俺の肩に手を置くと、深い皺の刻まれたその顔に満面の笑みを浮かべた。

「それじゃあこれからよろしく」

「何がですか？」

「顧問」

「はい？」

「日本文化研究サークルの顧問、僕だから」

「え」

「まずは部員に自己紹介しないとね」

「痛い痛い！！ 関節極め<sup>き</sup>なくとも逃げないですって！！ ちょ、

ホント  
」

~~~~~

という訳だ。そして現在、部員数12名の予想を遥かに上回る大所帯において、雑用係として日夜奮闘中である。

何処に行った、俺の青春…。



## 自己紹介。

「えと、今日から日本文化研究サークルに入った遠藤です。あ、高一です。宜しくお願いします」

カクカクとした動きで頭を下げるとパラパラと拍手が鳴った。

「スゲエ…ウチの部の名前覚えたとか、マジスゲエ!!」

と、チャラそうなボーズ頭。純度百パーセントの眼で感心されると逆にへこむ。そんなに鳥頭に見えるのだろうか、俺…。

（大丈夫、彼はいつもあんなだから）

良かった、普段からなら安心だ。いや、彼については余計に心配だけ。

「それじゃあ雑用係は遠藤と交代ね。山田君これまで御苦労様でした。ほれ、遠藤山田君から幕受け取って」

「おい待て、なんで俺だけ呼び捨てだコラ」

「新入りだからに決まってるんだろが、文句あんのかおお!？」

「え、ちよつ、キヤラ違うでしょ先生そんなヤクザみたいな」

「ああン!？」

「顔近い顔近い!!」

暴走する顧問に困惑気味の俺。ていうか誰か助けてよ、いや、助けろよ。

そんな俺の願いが通じたのか、一人の部員が割って入った。さっきのチャラ坊主だ。

「先生やめてくださいいッ!!」

頭一つ大きい彼の背中を頼もしく感じた。イイ人や、チャラ坊主。

「アタシだけを見てえッ!!」

はい？

「何度も言っているだろう？　一ノ瀬“君”。私には二十年連れ添った妻と息子達が、」

「私それでも構わない、二番目の“女”でも構わないからあッ!!」

いや、男ですやん。チャラい坊主頭の男やん。

「気持ちは嬉しくな　ゴホンゴホンッ!!　だが、ムリなんだ。諦めてくれ」

あ、あのオッサンわざとらしい咳で誤魔化しやがった。

「それじゃあ先生はアタシが他の誰かと結ばれても構わないって言うの!?　例えば　遠藤ごときでもおッ!!」

「俺が構います。っーか“ごとき”言うな」

「“構います”って…冗談のつもりだったのに遠藤ってば、だ・い・た・ん／＼キヤッ」

ああ、そうか。これを人は殺意と呼ぶのだな。

「でも御免なさい。アタシ、年上じゃないと無理なお」

「『『シャアッ!』』」

「なんで皆してガッツポーズなのよお!」

男子部員が一人残らず同じポーズをとっていた。満塁のピンチを切り抜けたピッチャーさながらの雄叫びが部室を揺らした。

「一ノ瀬君、人は見た目じゃない。心だよ、だから年上だとか年下だとかは些細な事なんだよ?」

「アタシ、先生の大人な所が好きです」

「バブーバブー。僕赤ん坊でちゅ」

「人としてのプライド捨てるほど嫌なんすか先生…。」

哀れな…。

「ラブリーでちゅ〜〜ッ!」

OH…まさかの逆効果、口から涎垂れてるよ…。

「おおお落ち着きなさいっ、一ノ瀬君、一ノ瀬君?唇尖らせてダッシュって、ちょ、待」

その時俺の頭の中では いや、恐らく他の部員もそうだったと思う 『一休さん』のあの音楽が流れていた。

すきすきすきすき　すき　すき　あいしてる

「ギィアアアアアアッ!」

それから一ヶ月間、先生が部室を訪れる事は無かった。

## 自己紹介。（後書き）

伏線を張ったり張らなかったりの二話でした。

ちなみに、一ノ瀬君の名前は“休”だったりします（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8017z/>

---

俺達の青春部。

2011年12月26日23時07分発行